

基調講演（小此木政夫・慶應義塾大学名誉教授）

米国が朝鮮戦争に介入した理由については、さまざまに論じられてきました。国際政治学的には「ミュンヘンの教訓」、すなわち第三次世界大戦を回避するために、断固としてソ連への宥和を拒否したという理解が一般的です。その他にも、大韓民国の樹立を支援した国際連合の權威を守護するためとか、あるいはクレディビリティの確保、すなわち同盟国や友好国の米国に対する信頼を裏切らないためなどの観点から説明されてきました。

しかし、ルイス・ハレーのように、第二次世界大戦に勝利して、日本を占領したことによって、米国は日本が抱えていた地政学的な紛争要因を引き継いでいたのだというような、ハッとする見解もあります。そのような観点から見れば、戦争を開始したスターリンが生来のジオポリティシャン（地政学論者）であったことが重要な意味を持ってきます。その点を軸にして議論いたします。

それ以前に朝鮮半島をめぐる戦われた日清戦争や日露戦争と比べて、朝鮮戦争はとても複雑な戦争でした。顕著な特徴だけ見ても、それは北朝鮮軍による南朝鮮の武力解放の試みとして開始されました。開戦までの経緯を見れば、スターリン以上に戦争の開始に積極的だったのは金日成です。それは分断された祖国を統一するというナショナリズムに支えられていたからです。その点については、韓国の李承晩大統領も同じでした。これらは内戦的な要素であったと言ってよいでしょう。永井陽之助教授が朝鮮戦争を「国際内戦」と定義したことはよく知られています。

第二に、米韓側の反撃が38度線を越えて進展すると、中国軍が介入して、朝鮮戦争は米中戦争に拡大しました。しかも、開戦前の2月に、中国はソ連と友好同盟相互援助条約を締結していました。冷戦が軍事化し、世界大に拡大されたのです。東アジアでも、朝鮮半島だけでなく、台湾、ベトナムなどが米国の防衛線の内側に編入され、冷戦の戦場になりました。しかし、朝鮮分断が解消されなっただけでなく、米国はベトナム戦争に介入したし、中国による台湾解放は今日まで達成されていません。要するに、朝鮮半島の国際内戦が東アジアの歴史を塗り替えたのです。

原点に立ち戻ってみれば、朝鮮戦争はスターリンと金日成が「局地的な奇襲攻撃」として企画したものです。また、そのことが朝鮮戦争の全体像を解き明かすカギになります。金日成、スターリン、毛沢東による開戦決定の内幕、東ドイツをモデルにしたソ連の北朝鮮政策などを多角的に論じ

ながら、朝鮮戦争の本質に迫ります。

筆者は米軍の韓国からの撤退や中国革命の成功に励まされたスターリンが、半ば計画的にそして半ば機会主義的に朝鮮での冒険に踏み切ったと考えています。その背後にあったのは、スターリンとロシアが抱えていた「地政学的な不安」ではなかったかと想像しています。

第一報告（川喜田敦子・東京大学大学院総合文化研究科准教授）

朝鮮戦争後の北朝鮮復興支援—東ドイツの咸興復興支援を中心に—

朝鮮戦争の休戦協定が結ばれた後、焦土と化した南北朝鮮の復興にあたって、東西両陣営は競い合うかのように援助を投下した。第二次世界大戦の敗戦国であり、当時、東西両陣営それぞれの内部で、戦争賠償の支払いを背負いつつ国際社会への復帰を目指していた東西ドイツ——とくに東ドイツにとって、朝鮮半島の情勢は大きな意味をもち、東ドイツは咸興（および興南）という北朝鮮の重要都市の復興に協力することになった。

東側諸国によって行われた北朝鮮支援については、ソ連・東ドイツを含む東側諸国間で情報交換が行われていたため、東ドイツの外交文書からその全容をおおまかにつかむことができる。本報告では、ドイツ外務省政治文書館（PAAA）およびドイツ連邦文書館（BArch）の史料を参照しながら、東側諸国の北朝鮮支援、とくに東ドイツの北朝鮮支援の実態を取り上げて論じた。

本報告は、大きく三つの内容から構成された。本報告では、まず、東ドイツによって行われた北朝鮮復興支援の概要を提示した。東ドイツによる北朝鮮への支援には、大衆組織レベルと国家レベルの二つの支援ルートがあった。大衆組織レベルでは、朝鮮戦争中に朝鮮支援委員会が国民の募金活動を展開し、北朝鮮に支援物資を送る活動が行われた。他方、国家による北朝鮮支援は、物資・技術・機材供与を軸とする国家協定と重要都市の復興支援という二つの形態をとって行われた。

本報告では、次いで、咸興（および興南）の復興の様相を確認した。咸興（および興南）では、東ドイツ通商省の管轄下で本国から派遣され、現地で復興支援にあたった建設関係の専門家チームの協力の下、1955～62年の支援期間中に、高層集合住宅の建設、公共施設の建築、インフラ整備、各種工場の建設が進められた。

続いて、本報告の最後では、朝鮮戦争後の北朝鮮の復興というテーマのもつ射程を確認した。この作業は、東ドイツによる北朝鮮復興を二つの観点からグローバルな広がりの中に位置づけることを通じて行われた。

その際、第一に注目したのは、社会主義都市建設の文脈である。東ドイツによる北朝鮮支援は、平壤に次ぐ第二の都市である咸興（および興南）の都市建設プロジェクトの形をとった。この時期、平

壤や咸興では、ソ連の建築家、およびソ連で学んだ東欧の建築家らの協力を得て、ソ連型の社会主義都市建設が目指された。北朝鮮支援がこのような社会主義都市建設の構想と人的ネットワークのなかで行われたことを示した。

第二に注目したのは、冷戦下の東西体制間対立の文脈である。朝鮮戦争後に東西両陣営が北朝鮮と韓国に対してそれぞれ展開した支援の体制を確認することを通じて、休戦協定締結後の朝鮮半島が、東西体制間の対立と競争が経済援助という形をとって表出する新しい局面の始まる場となったことを示唆した。

第二報告（南基正・ソウル大学日本研究所教授）

東北アジア戦争としての朝鮮戦争と韓日関係

「朝鮮戦争と日本」という組み合わせは、歪曲されたまま常識になっている東北アジアの歴史像を復元して正す「相互規定関係の概念群」である。朝鮮戦争の起源と原因と展開と結果に日本は決定的な意味を持っていた。日本を除いて朝鮮戦争を完全に理解することはできない。同様に朝鮮戦争を除いて戦後日本を完全に理解することができない。朝鮮戦争で遂行した日本の役割を十分に評価せずには停戦体制を終息させることはできない。同様に、戦後日本の展開における朝鮮戦争の持つ意味を正しく理解しなければ、戦後日本を総括することはできない。

日本は朝鮮半島の戦争に無関係な位置に立つことができない歴史的経緯がある。これが米国の影の中で日本が朝鮮戦争に間接的に参戦する背景になった。一方、朝鮮戦争は当初から日本をめぐる米国とソ連の力比で始まった側面がある。1950年初め、冷戦の戦線は朝鮮半島ではなく日本だった。日本は朝鮮戦争勃発と同時に米軍の反撃のための出撃基地となった。また日本は朝鮮戦争の全過程を通じて、補給、輸送の中継基地、軍需物資の修理及び生産基地、訓練及び休養基地など後方支援基地としての役割を果たした。この後方支援の過程で日本人が動員された。日本人労働者の「参戦」は総体的に約8,000人規模であり、その規模は16カ国の参戦国と比較すると上位6位の実績であった。以上の戦争協力は、日本が米国の占領下にあるという条件の下で可能なことであり、まだ国際法上の「国家」ではなかったため、日本は「参戦国」ではなく「交戦国」でもない。ただ、米国によって安全を保障される位置で後方支援の役割を担っただけだ。この現実を「基地国家」と呼ぶことができる。サンフランシスコで平和条約が締結され、日本が外交主権を回復すると、日本外務省は世界各地で業務を再開した大使館を総動員し、該当国の実力者と会って、停戦が日本の政治経済に及ぼす影響を分析する一方、停戦後の朝鮮半島問題関連の国際会議に日本が参加する可能性を探った。

朝鮮半島平和プロセスの諸段階で、日本は南北朝鮮の和平や米朝協議への介入を試みていた。しかし、一方でそうした外交は、いわゆる朝鮮半島平和プロセスの「蚊帳の外」で展開された。朝鮮戦争はしばしば「忘れられた戦争」という別称で呼ばれる。「忘れられた戦争」の中で日本は「隠

された存在」だ。朝鮮戦争の終結を論議する中で、日本の存在がなかなか前面に現れないのはこのためだ。しかし、問題は日本が単なる「隠された存在」ではないということにある。日本が果たした役割は決定的である。

日本の「参戦」は非常に複雑な問題を投げかけてくれる。朝鮮戦争を終結させる過程でその複雑系の現実が再び姿を現している。

第三報告（川島真・東京大学総合文化研究科教授）

中国から見た朝鮮戦争

—陳肇斌『中国市民の朝鮮戦争—海外派兵をめぐる諸問題』（岩波書店、2020年）に即して—

中国現代史研究の進展、また冷戦史研究の新たな動向の中で、中国から見た朝鮮戦争についても新たな事実や歴史像が描かれつつある。前者については、毛沢東ら指導部の視点だけでなく、それぞれの地域や社会からの視点が重視されるようになり、また後者については東アジア各国での文書公開の結果、米ソ英などの大国だけでなく、東アジア域内の視点を重視した冷戦史が描かれだし、また他方で社会、経済、科学、文化など、総合的に冷戦を捉えていく研究動向が生まれ出している。こうした新たな動きを踏まえた中国から見た朝鮮戦争像を紹介するのが本報告の目的である。具体的には、昨今公刊された陳肇斌『中国市民の朝鮮戦争—海外派兵をめぐる諸問題』（岩波書店、2020年）に即して紹介したい。

従来、「中国から見た朝鮮戦争」と言えば、和書では朱建栄『毛沢東の朝鮮戦争—中国が鴨緑江を渡るまで』（岩波書店、1991年）、そして沈志華著・朱建栄訳『最後の「天朝」—毛沢東・金日成時代の中国と北朝鮮（上・下）』（岩波書店、2016年）が代表的な業績とされ、またそのほかにも昨今では経済建設や国家建設の観点からの研究、また民衆の動員に関する研究が蓄積されてきた。だが、陳はそれらについて「相変わらず毛沢東ら政策当局者に限定され、それ以外の一般市民の動向は、ほとんど議論の俎上に上っていない」とし、また民衆動員を扱った研究に対しても、「中国市民の言行それ自体を深く掘り下げて全面的に検討を加えたとは言えない。市民に触れながらも主役としては扱っていないからである」と批判を加える。そして、「海外派兵に付随するこれらの問題について、中国市民はどのように考えていたのか」という課題を設定し、中国の市民がこの戦争を認識した「1950年11月を中心にその前後の一週間も入れた約1ヶ月半の期間を決定的な時期と考え」、その時期における中国市民の朝鮮戦争観を考察した。そこでは、内部発行資料や地方新聞、さらには知識人や軍人の残した日記などが用いられている。具体的には、各地域別の認識、知識人、商工業者、労働者、将兵の認識などを、個々人の個別の認識などを取り混ぜながら叙述を展開した。そこでは、朝鮮戦争に参戦すること、すなわち海外派兵について慎重で、また毛沢東指導部

にも疑問を呈する認識や、親米感情に基づいてアメリカ軍が中国に攻め込むことに期待したり、蔣介石軍の到来を予測したりするなど多様な認識が、地域別、階層別、また個人ごとにあることがわかった。そして、中国志願軍が平壤を奪還する 1950 年 12 月になると、中国市民の不安感が払拭され始めて、次第に毛沢東政権への信頼が増していくとする。

朝鮮戦争は東アジアの冷戦史研究に決定的な役割を果たした戦争である。そしてこの戦争は歴史になりながらも依然として現在の問題でさえある。だが、少なくとも歴史となった部分においては、この陳の研究にあるような、政治外交史、軍事史を超えた豊かな歴史が描かれることが期待され、それが現在の問題の描かれ方にも関わってくることを望まれよう。